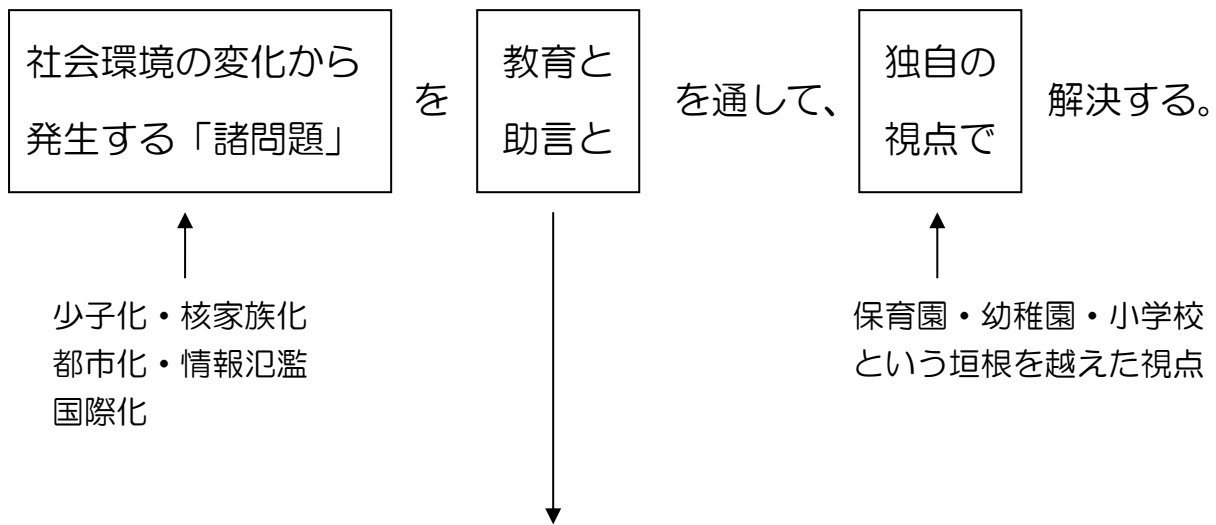


自 平成 31 年 4 月 1 日  
至 令和 2 年 3 月 31 日

## 令和 1 年度 事業報告書



1. 教育事業（教育実践を通して）

- (1) 人と関わる力の育成（幼児とその親） ..... 2
- (2) 考える力の向上（幼児・児童） ..... 4
- (3) 体を動かす力の習得（幼児・児童） ..... 5

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

- (1) 育児・教育に関する相談と助言 ..... 6
- (2) 実践研究とその成果の公開 ..... 6

3. その他（地域社会への還元）

- (1) 文化的活動の「場」の提供 ..... 7
- (2) 震災時に避難する「場」の提供 ..... 7

## 1. 教育事業（教育実践を通して）

前記スタンスに基づき、下記のような教室を設置し、社会的諸問題の解決に当たった。

（参加人数は最多在籍月の数値）

### （1）人と関わる力を育成する教育

### 公益目的支出事業①

#### ■はじめての教室（対象：1歳～3歳の幼児とその親）

【内容】 他の親子と継続的に関わりあう「場」を設定し、広々とした環境の中でクラス担任のリードの下、幼児には遊びを通して社会性を身につけさせ、親には適宜、アドバイスをしたり勉強会を開催したりしながら子育てに関する不安を解消させる。

【結果】 今年度も多くの親子が上記のねらいに沿って活動に参加した。数年来、何度も政府からの対策が打ち出されるものの良い結果に繋がらないのが「少子化問題」である。総務省のデータでは、少子化について、今後出生率が好転しない限りは、生産年齢人口は大幅に減り続ける。2050年の年少人口（0歳～14歳）の数値は1,077万人と想定。2018年現在より470万人近くも減ると推定されており、さらなる少子化が進むと考えられている。少子化が進む中、近所に同年代の友だちを見つけにくい環境が広がっている。その結果、親同士で情報交換をする機会が限られてしまう。また、核家族が普通となった現在、親が自分の兄妹の子育ての様子を目にしていない。祖父母からアドバイスが受けられないなど情報不足に陥る。そのような中、当教室において同じ学齢の子どもが集まり、そこで指導者の助言の下、親も子どもへの接し方を学ぶことで親の精神的な安定に繋がる。そして、それは子どもへの接し方にも大きな影響を与えている。親子で学べるこのような場は、人格形成の基礎となる時期の子ども、そして親にも、いくつもの面で大きな支えになっていると言えよう。

特別な特訓などしなくても幼稚園の考査は大丈夫であることを理解してもらうため、夏季に3歳、秋季に2歳を対象に、考査問題を楽しむ観点から保育を行う機会を設け、保護者の理解を得ている。

2月末に政府からの休校要請に従い、当教室でも3月は休校となったが、保護者からの強い要望もあり、修了式だけは実施した。約1月、保育から離れていたにもかかわらず、子どもたちの態度は実に立派であり、一年間の保育の成果を感じる場面であった。

参加者 親子 147 組

内 訳 1 歳児親子 52 組 (週 1 回・年 36 回の通常保育および  
2 日間の夏季保育)

2 歳児親子 66 組 (週 2 回 or 3 回・年 69 回 or 101 回の  
通常保育および 4 日間の夏季保育)

3 歳児親子 29 組 (週 3 回 or 4 回・年 101 回 or 135 回の  
保育および 4 日間の夏季特別保育)

保護者に対する指導 1 歳児保護者対象に年 5 回の育児指導ほか

2・3 歳児保護者対象に年 5 回の育児指導および  
社会教養、進路などに関するレクチャーほか

希望する保護者に対する個別のカウンセリング  
を延べ約 180 人に実施。

## (2) 考える力を向上させる教育

### ■言語力UP教室 (対象：3 歳～5 歳の幼児)

【内容】 将来、論理的思考ができる人間に育てるため、「幼児なりに」筋道を立てて物ごとを考える経験をさせておく。

【結果】 遊びの中で科学的な現象に触れさせたり、道具の工夫されているところに気づかせたりして、その現象や仕組みを言語化にさせる活動や、社会的な事象を考えるための素材として活かす活動を行った。

今年度も様々な切り口から授業を行ってきたが、年長児においては、特に「わかりやすく話す」ということに力を置いて指導した。「自然災害の多い日本に適した家を考える」というテーマでは、台風の強風にも耐えられるよう、地下に深く掘り下げた住宅や大地震を想定した安定感ある幅広な住宅を絵に描いて提案し、年長児なりに状況を捉えて考えられていた。授業のまとめとして、全員に向けて発表する場面では、地下深く埋めた理由を「強い風が吹いても根っこのように深く埋まっていれば倒れないから。」幅広の家にした理由を「高い家だと上の方がたくさん揺れて怖いから。」と具体的な例を出して分かりやすく説明できた。

政府からの休校要請により3月の授業を実施できなかったため、次年度の夏季に全クラス補講を行い、行えなかったカリキュラムを補うことになった。

参加者 幼児 66 人

内 訳 3 歳 35 人 (週 1 回・年 35 回+夏季授業と言語力診断各 1 日)

4 歳 19 人 (週 1 回・年 35 回+夏季授業と言語力診断各 1 日)

5 歳 12 人 (週 1 回・年 35 回+夏季授業と言語力診断各 1 日)

#### ■学習力UP教室・夏季学習教室 (対象：小学生)

【内容】 学ぶ喜びを感じ、自信がもてるよう、基礎学力の定着を中心に確実な学力の底上げを図った。基礎学力の充実は学習意欲の素となり、さらに内容を深めた発展的・応用的な学習に向かうためのエネルギーの源となる。それを個に合わせて育てるために、常設教室では教師 1 人に対し子ども 1 人または 2 人で、夏季教室では 6・7 人という少人数で授業を行なった。

【結果】 基本的な学力が定着し、予習を終えて授業に臨むなど自主的な学習意欲も育ってきた。また、夏季教室は 1 クラス 6～7 人で実施したことにより、意見や質問を出し合ったりするなど、相互作用による集団思考が働き、小グループならではの成果が得られた。

参加者 常設教室 小学生 11 人 (週 1 回・年 35 回)

夏季教室 小学生 28 人 (夏休み 6 日間集中)

### (3) 体を動かす力を習得させる教育

#### ■体育教室（対象：2歳児～児童）

【内容】 幼児には、歩く・走る・投げる・回るなどの基本的な体の動きが「満遍なく」できるようにし、「体を動かすことの楽しさ」を幼児期に覚えさせる。

児童には、自分の体を操る基本的能力を「いろいろな運動」を通して身につけさせ、運動に対する「苦手意識」を持たせないようにする。

【結果】 社会では幼児の習い事として水泳教室が人気である。また、小学生ではサッカーや野球、新体操、アイススケートなどの「種目」も人気が出ているようだ。しかし、これらの動きは、ともすれば偏った運動能力を育てやすい。当教室では幼児には全ての運動に繋がる基礎的な動きを習得させ、小学生には器械体操に重点を置いて体を操るための基本的な能力を育んだ。その結果、保護者からは、小学校の高学年や中学に進んだ時、どのような種目にも自信を持って取り組めるようになったという声が寄せられた。

政府からの休校要請により3月の授業を実施できなかったため、次年度の夏季に全クラス補講を行い、カリキュラムを補うことになった。

参加者 幼児 143人（週1回・年間35回＋夏季集中授業4日）  
小学生 34人（週1回・年間35回＋夏季集中授業6日）

#### ■剣道教室（対象：小学生・中学生）

【内容】 剣道を通して心身ともに自己を強く逞しくする。

【結果】 厳しい指導をすると親からクレームが来るような時代になったが、当教室では保護者の理解を得て、剣道を通して「与えられた課題に全力で取り組む」ことを子ども達に厳しく求めている。その厳しさを理解する子どもも増え、最近では稽古前に来て練習する姿も見られた。

政府からの休校要請により3月の稽古が実施できなかったため、次年度の夏季に補講を行い、不足分の稽古を補うことになった。

参加者 小学生6名（週1回・年36回）

## 2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

### （1）育児・教育に関する相談および助言

#### 公益目的支出事業②-1

【内容】 以下のような形で育児や教育に関する相談を受ける。

- ①前記教室に参加する親からの相談を、教室以外でも随時受ける。
- ②教室に通えない親の電話相談や来訪相談等にも応じる。

【結果】 個別の相談を 35 人から受けた。また、駒沢大学からの依頼で同大学法学部学生約 100 人に対し尊厳死に関する講演を行ない、自分が親になった時に子どもに「生の尊さ」をいかに教えるかを考えさせた。また、ここ数年は発達障害を疑わせる幼児の相談を受けるようになった。そこで、本年度は実践的研究をスタートし、その子どもに合った進路の選択肢を保護者に示せるようにした。

### （2）実践研究とその成果の公開

#### 公益目的支出事業②-2

##### ①帰国外国人児童生徒教育の支援

【内容】 日本語力が不十分な児童生徒の言語習得、教科学習フォローの仕方について、小中学校等の教員、ボランティア団体指導者の研修をする。外国人等の入国者は新型コロナの影響で減少はしているものの、すでに来日して就労している家庭は多く、幼稚園・学校などで日本語指導を要する児童生徒が平成 28 年調査で 5 万人を超えている。過去、先進的な研究と実践をしてきた当財団の知見を提供することは依然として重要だと認識している。

【結果】 令和 1 年度は 4 団体から依頼を受け、以下の 3 団体に出向き、180 人に研修を行った。

相模原市教育委員会・日野市国際交流協会・可児市国際交流協会

長年、研修や講演を担当してきた職員が定年を迎えたため、今後は、他の職員が学校やボランティア団体の指導現場に入り、相談・助言に応じていく方向で考えている。

##### ②研究・調査とその公開

【内容】 外国人児童生徒に対する日本語指導は、最近では教科指導へと広がりを見せており、日本語講師や国語の教員では十分に対応できないことも増えてきた。そこで易しい日本語で書かれた教材を作成し希望者に対し配布した。研修会での配布以外にもインターネットによる教材送信をするとともに、ホームページ内に教材紹介ページを立ち上げた。

### 3. その他（地域社会への還元）

財団の事業としては位置づけていないが、必要に応じて次のような協力をした。

#### （1）文化的活動の「場」の提供

【内容】近年、地域の人々の文化的活動が活発になってきているにも拘わらず、公民館などの公共の場の確保が難しくなっている。そこで、活動の場を無償または実費で提供することで、文化的活動のサポートを行った。

【結果】同好会への会場提供など

ブリッジの会 年 30回（7人）

書の会 年 23回（10人）

コーラスの会 年 9回（約40人）

聖書を英語で読む会 年 4回（約3人）

#### （2）震災時に避難する「場」の提供

【内容】耐震化を進め、震災時に地域の人々の避難場所となるようにする。

【結果】今後、予想される東京直下型の地震の時は、会員でも相当多くの帰宅困難者が出るほか、歩いて帰宅する一般住民が途中で帰宅を断念し、宿泊する場所を必要とすることも考えられる。そのような事態に対応できるよう毛布や食料などの備蓄量を増やす方向で検討を進めている。今年度は幸いにもこの協力をしなくてもすんだ。





Hatano Family School